

2017年 新茶のご案内



2016年秋 やまとみどり実生（圃場：ゲンダラ）

いつも当園のお茶をご愛飲いただきありがとうございます。

今春の月ヶ瀬梅林の梅は例年に比べて長いあいだ花を咲かせていました。いっぽうで桜の花は数日遅れ気味でしたが、一気に満開となりました。梅の開花は“地温”に、桜の開花は“気温”に関係しているようで、そんな今年の気候の傾向が、どのような特徴の新茶を育ててくれるのか、毎日の天候に目が離せません。

茶園では、春の訪れとともに休眠から覚めた芽がゆっくりと膨らみ育ち始めています。これから晩霜(ばんそう)や雹(ひょう)など、気が抜けない日々となりますが、順調に生育してくれることを願っています。

一年の最初に収穫する一番摘みの新芽は、秋から冬のあいだ、茶樹の根や莖にじっくりと蓄えていた栄養が少しずつ新芽を芽吹かせていきます。そして茶の新芽が萌芽してからも、朝は5℃近くまで下がり、日中は約20℃まで上がる奈良・月ヶ瀬の山間地特有の朝昼のリズムを繰り返すなか、ゆっくりとゆっくりと生長することで、重みのあるひき締まった新芽

に育ちます。茶は古来、薬としてその歴史が始まったとされています。夏は「葉」を、秋は「実」を、冬は「根」を、そして春には「芽」を…。というように、タケノコやワラビを食べるように、新茶の時期には茶の新芽の勢いを体に取り入れることが、一年を元気で過ごすためにも大切なことだと考えています。これから緊張感高まる新茶のシーズン、チーム岩田一同が力を合わせ、仕上がった新茶を出来る限り早くお届けできるよう、収穫・製茶・袋詰め・箱詰めと精一杯頑張ります。

茶園のこと

奈良・月ヶ瀬の自然のリズムでお茶が育つよう意識した有機栽培そして自然栽培に取り組むと、その地域の自然環境そのものが、お茶の特徴となって表れてきます。

連なる山々に茶山が点在しているここ奈良・月ヶ瀬では、各茶山の「方角」「土質」「傾斜度」等の条件が異なることから、茶園ごとに異なる特徴のお茶が出来てきたことを、昨年の新茶案内「茶園百景」で紹介させて頂きました。さらに月ヶ瀬に点在する茶園ごとに、いろいろな特徴が表れる理由について、分かったことがあります。

○異なる年代の地質があること

当園の茶園は『恐竜が全盛期だった頃とされる 1～2 億年前の地質(写真 1)』と『人類が現れ始めた頃とされる 500～600 万年前の地質』があります。そのため「1～2 億年前、恐竜が全盛期だった時代の地質に根が張って茶樹が育つ茶園」と「500～600 万年前、人類が現れ始めた時代の地質に根が張って茶樹が育つ茶園」、そして「両方の地質が混ざりあった地質に根が張って茶樹が育つ茶園」も少しあり、同じ地域内であっても、年代が全く異なる地層でお茶をつくっているということになります。



(写真 1)恐竜が全盛期だった 1～2 億年前の地質の茶園。大きな花崗岩が、たくさん露出しています。

○琵琶湖が誕生した土地であること

むかしむかし琵琶湖は月ヶ瀬の一部を含む伊賀盆地にありました。これを古琵琶湖と言います。今は滋賀にある琵琶湖ですが、600万年～300万年前頃には三重県の伊賀盆地あたりにあり、その後、北に移動しながら、約60kmも離れた現在の琵琶湖になったということです。最近、『移動する湖、琵琶湖（京都自然史研究所 発行、横山卓雄著）』という本を読んでいると、「最初、古琵琶湖が発生したのは約600万年前、伊賀盆地西方の月ヶ瀬石打ブロックである」と書かれていました。これは古琵琶湖発生（誕生）の地に、当園の茶山があるということで、「人類が現れ始めた頃とされる500～600万年前の月ヶ瀬の地質」をつくったということです。大きな川の跡があり丸い石をたくさん含む所(写真2)、この辺りでは見たこともない遠くから運ばれてきたと思われる土が重なりあっている所、湖の底に焼き物に使うような粘土が堆積した所など、とにかく多種多彩な鉱物(写真3)で覆われた地層があります。そのような地質で茶樹が育つのが、この地域（産地）の特徴の一つだと考えます。



(写真2)

大きな川の流れの跡があり、丸い石を多く含んでいる古琵琶湖の地層。こんな地層に茶樹の根が張っています。



(写真3)

多種多彩に重なり合っている一か所の古琵琶湖の地層から採取した、7種類の鉱物（土）。色や手触りも異なります。

○根について考える

2017年の年明けに「葛屋 中井春風堂」(奈良 吉野山)の葛会で葛について勉強させて頂きました。ちょうどこのタイミングで今冬、「老間」茶園の隣で、笹や蕨そして葛などが蔓延っている20年も耕作していない茶山に、新たに種を植えようとしているところでした。そこで草刈り、雑草の抜根などの作業を進める中、意識して葛という植物を観ると、平らな面より、土手の斜面で生える葛のほうが、ツル(株元)が太く、根も太くて長いものが育っていました。この太い根には、本葛になるデンプンがたくさん蓄えられています。(図1)根は重力の方向に向かって伸びます。斜面のほうが軟らかな表土が続くので平坦地より根が育ちやすいということです。(図2・3)

機械化が出来ないような斜面の茶園環境だからこそ、「根」を活かしたお茶づくりが出来ることを実感しました。

(図1) 茶の木と葛の根



種を植えるため、抜いた急傾斜の茶株の根はとても太かった



たくさんあった葛の根も、斜面に添うように長く伸びていたものが一番太かった



(図2)

生育環境の違いによる葛の根の大きさを比較する

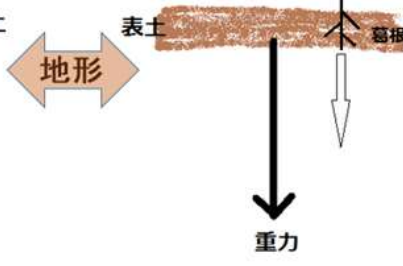
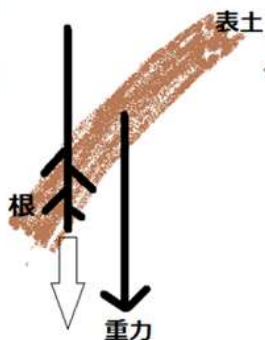
斜面に生えている葛

平らな面に生えている葛

葛のツルが木に巻き付くことで、陽が当たる場所までツルが伸び、光合成を行いやすい生育環境となっているため。

光合成

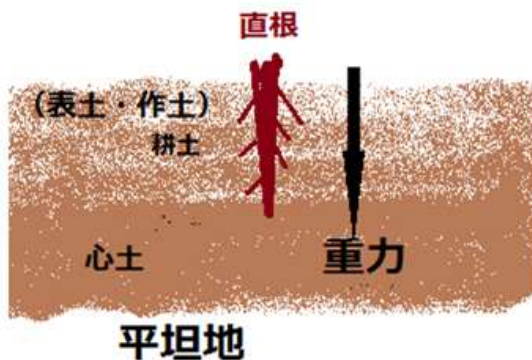
葛のツルが地面に沿って伸びているため、蕨や笹との光合成を行うための生存競争が激しい生育環境となっているため。



月ヶ瀬健康茶園
(2017年1月 老間に隣接する耕作放棄畑)

(図3)

急傾斜地と平坦地の根の伸び方を考える



月ヶ瀬健康茶園

岩田文明

耕土 (表土・作土)

… やわらかく、空気を含む地層 ⇒ 根が広がりやすい

心土

… 圧縮された地層 ⇒ 根が広がるのが難しい

2017年の新茶のこと

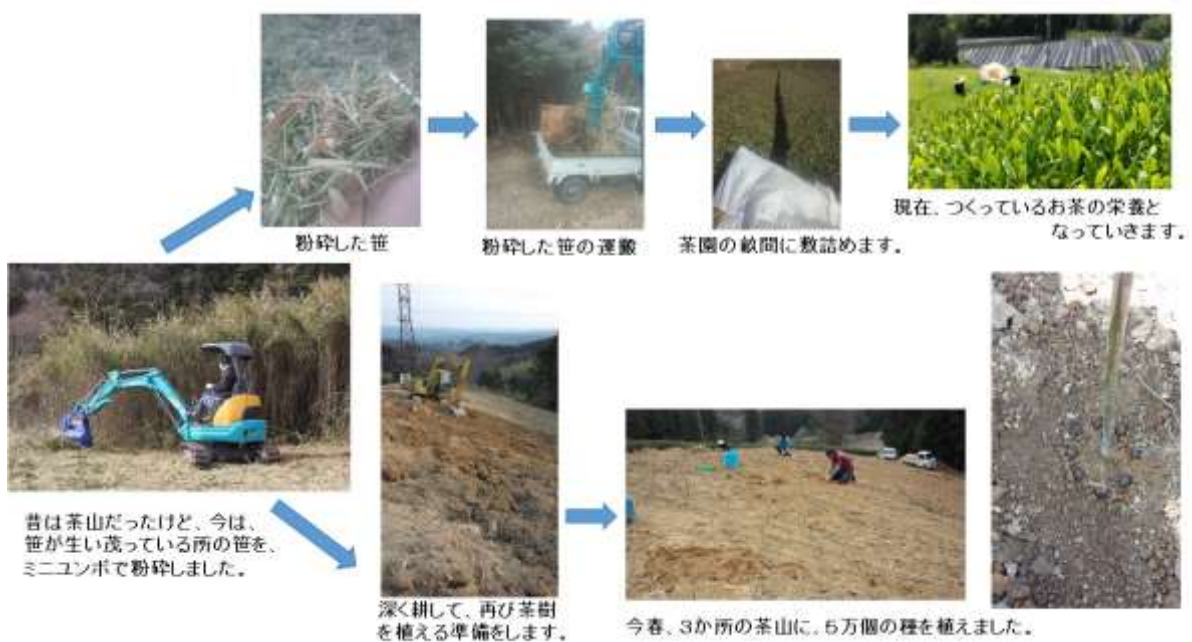
新茶の収穫時期が遅いということは、冬が長く、茶樹が栄養（デンプン）を蓄えることができる期間が長いということです。栄養を蓄えるための器（根）が大きければ大きいほど、貯蔵していた栄養分が一番茶（新茶）の生長の源になり、香りや味の特徴へとなくなっていきます。そして、ホッとするような炭水化物（デンプン）由来の甘い香味の新茶ができてくるのではないかと考えています。同時に、ミネラルが豊富な多種多様な土（鉱物）の中に茶樹の根がしっかりと張ることで、自然環境の特徴を表現できるような新茶になるのではないのでしょうか。永いあいだ眠っていた地質を勝ち割って耕すことで、恐竜が生きていた時代や人類が現れ始めた時代に造られた地層に深く根が張り、お茶が育ちます。急須と湯だけで飲むことが出来るお茶だからこそ、そんなお茶の力（魅力）を、しっかりとお届けできるよう、今年も全力で取り組んでいきます。

今年定番のお茶の他に、いくつかの新しい手法のお茶を仕上げていく予定です。“飲むこと”をイメージしてこれらの新芽を製茶していく試みです。

（詳しくは6月半ば頃おたよりホームページ、フェイスブックなどでお知らせさせていただく予定です。）

さいごに

昔は茶山だったけど、今は笹が生い茂っている所に、今春、種を植えました。ミニコンボに装着した機械で、背丈以上もの笹を粉碎しながら、土地を再生していきます。粉碎した笹は茶園の畝間に敷詰め、現在つくっているお茶の栄養となります。再び切り開いた茶山に植えた5万個の種は、これから、この土地に深く根を張っていきます。



2017年4月 月ヶ瀬健康茶園 代表 岩田文明

※地質のこと、根のことについて詳しくは下記をご覧ください。

○ホームページ 検索 「お知らせ・ブログ」および「文明語る」にて
○フェイスブック 検索